飯能市立博物館
Hanno Municipal Museum

タデのなかまを紹介します

長谷川 裕子

厳しい残暑が続いていますが、天覧山・多峯主山周辺ではヒグラシの鳴き声をよく聞くようになり、夏が終わりに向かっているように感じます。そこで今回は、夏から秋にかけて見かけられる植物で、タデのなかま(タデ科)をいくつか紹介します。この時期に見かけられるタデのなかまは、白～赤色の小さな花をいくつもつけるものが多く、初めて見た人は同じに見えるかもしれません。ですが、花のつき方や刺の有無などから見分けられます。

写真① イヌタデ

写真② ミゾソバ
河合裕氏撮影

写真③ サクラタデ

写真①は、イヌタデといいます。草地や荒れ地に生え、天覧山・多峯主山周辺以外でも畑などでよく見かけられます。いくつもの小さな赤い花がぎっしりと上部につきます。本種は、食用として用いられていたヤナギタデというタデに似ているのですが、葉に辛みがなく役に立たないということから、イヌタデと名づけられました。食用としては用いられませんでしたが、小さな赤い花を赤飯に見立てて、アカマンマと呼び、子どもがままごと遊びに使いました。実際に使って遊んだ方もいらっしゃるのではないでしょうか。

写真②は、ミゾソバといいます。湿り気のある場所に生え、「溝に生えるソバ(蕎麦の花)に似た草」という意味から名づけられました。葉はほこ形で中部がくびれていて、牛の額に似ていることからウシノヒタイと呼ばれることもあります。また、茎には下向きの刺があります。刺があるものは特徴として分かりやすいですが、安易に触れると細かな刺が刺さるので、気をつけてください。

写真③は、サクラタデといいます。日当たりの良い湿り気のある場所に生え、天覧山・多峯主山周辺では道沿いにも見かけられます。高さは 50～80 ㎝くらいで、細長く伸びます。タデの仲間ではもっとも大きな花を咲かせ、その花は桜の花に似ています。昨年の秋に本郷入りでサクラタデの群生を見かけましたが、いくつも咲いた桜色の花に陽の光があたり、なんとも幻想的な風景が広がっていました。

このようにタデのなかまは一見似ていますが、よく見てみるとその形や生息環境が違い、どの種も特徴があります。暑さが和らいだら、身近な場所を散策してみませんか。近くでイヌタデに出会えるかもしれませんし、他にも色々な種類の花を見かけるかもしれません。散策しながら季節の移ろいを感じてみてはいかがでしょうか。